

平成21年 5月29日現在

研究種目：基盤研究 (B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18330167
 研究課題名 (和文) 「伝承・習い事」文化における学習様式と生涯学習の現代的課題に関する比較研究
 研究課題名 (英文) The Comparative Study on the Modes of Learning and the Contemporary Topics of Lifelong Learning in the Context of Traditional Learning Cultures in East Asia

研究代表者
 渡邊 洋子 (WATANABE YOKO)
 京都大学・大学院教育学研究科・准教授
 研究者番号：70222411

研究成果の概要：日本・韓国・中国という視野のもと、主に国内で「伝承」文化と「習い事」文化の世代間継承のあり方とそこでの課題に注目した。京都、沖縄、新潟の三府県でフィールドワーク、学校対象のアンケート・聞き取り調査などを行い、その成果を、学会での口頭発表、学会年報への論文投稿、最終報告書 (本編、資料編①・②) などで報告した。今後3年間でいう中国・韓国との三国比較研究に向け、ソウル・北京で予備調査と研究協力の依頼・打合わせを行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,600,000	0	1,600,000
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
年度			
総計	6,300,000	1,410,000	7,710,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：生涯学習、伝承文化、習い事、学習様式、伝統芸能、文化的多様性、文化的変容、ローカル・アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、「女性の学び」の観点から日本の生涯学習を考察する中で、「習い事」文化の重要性を認識し、グローバリゼーション下での「ローカルな学び」の「学習様式」を示唆する「伝統 (伝承) 文化」の学びに注目してきた。またグローバリゼーション下のコミュニティ教育に注目し、韓国の平生 (生涯) 学習プログラムを分析する中で、比較研究的なアプローチの有効性を確認し、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、主に日本・中国・韓国という東アジア諸社会における「伝承」文化と「習い事」文化に着目し、その継承のあり方 (伝達・伝授、学習・習得の様式) に通底する基本原理と諸要素を抽出し、同時に、グローバリゼーションの下での人々の生活と生涯学習の諸課題が、その文化の存続・変容をめぐるダイナミズムにいかに関係しているかを比較考察するものである。

近年のグローバリゼーションの潮流は、人々の経済生活のみならず、その地域生活や

地域文化のあり方にも大きな影響を及ぼしており、それゆえに地域生涯学習をも大きく規定してきた。現在、地域や生活に根ざした文化的価値の多くが、欧米、特にアメリカ中心のグローバルな文化に取って代わられる一方、その流れに抗しつつ自らのアイデンティティを際立たせようとする文化的な動きも各地に生まれている。文化的な単一化・画一化を推し進める大きな流れの中で、日中韓をはじめとする儒教圏の地域で培われてきた「伝承」「習い事」文化は、いかにしてその独自性を護ろうとし、またいかに時代に適応すべく変容してきているのか。また、それらの文化との関わりの中で人々は、どのように自らの（ローカル・）アイデンティティを形成・再構築し、グローバル化下の現代的諸課題に対応しているのか。これらの様相は、各々の社会における今後の生涯学習の発展の方向性を示唆するものと言えよう。と同時に、欧米モデルの単純な適用ではなく、また一国主義的な発想によるものでもなく、これらの地域を「東アジア」という生活圏で捉えていこうとする本研究は、人々の生活や地域に根ざした生涯学習のあり方を模索していく上で重要な示唆を得られると考えた。

3. 研究の方法

国内の研究対象としては、歴史的・政治的・社会的・文化的に異なった背景を有しつつも、いずれもゆたかな文化土壌をもつ京都、沖縄、新潟を取り上げた。具体的には「伝統」や「文化」の「形」を重視しつつ維持・存続をはかる京都、時代状況の変化に柔軟に対応して活力を得る沖縄、そして両者と異なり、継承への志向も変化への対応も顕著でない新潟、などと特徴づけられる。2006（平成18）年度の研究活動では、メンバーの認識の共有化をはかるため、全員が三府県のすべての予備調査（フィールドワーク）に参加し、研究の方向性を定める手がかりを得た。2007（平成19）年度には、それらの調査で得られた知見や比較の難しさを考慮し、共通の地域的基盤と考えられる「学校」に注目して、三府県の全学校対象の「文化伝承活動の取り組みに関わるアンケート調査」を行った。学校が、各地域の伝統文化や文化継承活動にいかにして関わり、それらをどう捉えているか、またそこにはどんな可能性や課題があると考えられるか。このような問いを検討できるような設問を用意してアンケートを送付・回収した。また、沖縄を事例に、協力要請を受け入れて下さった3人の小学校長へのインタビューによる補足調査を行った。これらの調査結果の一部については、日本社会教育学会研究大会で共同発表し、一部論文化を試みた。平行して、研究代表者が独自の沖縄調査を継

続し、沖縄における伝統芸能の全体像および諸相の解明、社会教育がそこで果たした役割に関わる事例研究を行って論文化した。

2008（平成20）年度は、アンケート調査結果を報告書にまとめる作業と平行して、各メンバーが独自の調査研究や論文執筆作業に取り組んだ。10月および3月には、本研究の後半期に向けた国外予備調査を行った（「2、国外予備調査」、Ⅲ張論文などを参照）。

4. 研究成果

(1) フィールド調査

① 京都調査

京都調査は、祇園祭開催時に第一回研究打ち合わせ会議、引き続き研究会が開催されたのを受け、祇園祭の宵々山、宵山開催中の各鉾町の展示や祭への取り組みの様子などのフィールドワークを中心とする予備調査として開始された。宮前報告は、その経過を丁寧に報告したものである。研究会メンバーに共有されるだけの目的で書かれたものなので、報告書用の推敲はなされていない。また、以下のような報告は、すべて研究会メンバー用のホームページにアップされ、メンバーによって適宜、参照される形で共有された。中池報告は、予備調査後、現在は何らかの理由で鉾を立てない休山や祇園祭を側面から支える川島織物などに関心を発展させたものである。3番目の渡邊・中池のインタビュー記録は、第一回研究会講師の斉藤寿始子さんがご紹介下さった那須さんに、二度もお話を伺うことができた際の記録である。前田報告も、予備調査時のインタビューである。

今後の課題は、祇園祭の「継承」にさらに焦点を当て、山鉾連合会やボランティア組織などの連携・協力と各地域での後継者・支援者育成の取り組みを文化的側面から考察していくことである。観光産業にも深く関わる「京都の文化」が、グローバル化と経済不況のもとで、どのような「存続」「発展」を志向していくのか、そこで「変わらない」ものは何で、「変わり得る」ものは何なのか、またそこでの学校や生涯学習活動との関わりを、丁寧に考察していきたい。

② 新潟調査

新潟調査は、2006年度秋の予備調査で、新潟・佐渡地域へのフィールドワークを行った。佐渡では、郷土史研究家の山本修己氏に、佐渡の歴史と文化的土壌についての大変興味深いお話を伺った。その後、文弥人形の公演活動、本間家をはじめとする能舞台、現代的にアレンジしつつ和太鼓の精神を伝えようとする鼓童の根拠地（鼓童村）、文化センターでの能楽の講座などを見学した。新潟では、

新潟大学の石坂妙子教授（国文学）から、市古流の日本舞踊の保存・継承への取り組みと大学の関わりについてレクチャーいただき、意見交換を行った。また月潟村の角兵衛獅子の伝承について早くから注目しており、練習風景の見学に加えて、同保存会会長の土田モトエさんへのインタビューも実現した。

今後の課題としては、佐渡地域の集落ごとに能学や鬼太鼓、人形芝居などがどのような形で存在しており、そこでの「継承」はどのように行われているのかを、月潟村やそれ以外の地域の文化伝承活動と比較しながら、新潟・佐渡地域の「伝承」の特色を明確にしていくことが挙げられる。

③ 沖縄調査

沖縄調査は、マイクロバスを借りての大規模な予備調査から始まった。真島先生や新城先生からのレクチャーで目を開かれ、本部島や伊江島、具志堅公民館、琉球村など、駆け足ながらも沖縄の伝統芸能の地理的・歴史的・社会的背景や文化的素地などについて、実感として受け止めることができた。沖縄の伝統文化や芸能活動などに触れたインパクトは大きく、この3年間の本研究会の中心的なフィールドになったと言っても過言ではない。とりわけ、研究メンバーに沖縄出身・在住・在勤者の芳澤拓也氏が参加したことによって、沖縄調査に取り組む上で強力な体制ができたと言える。三府県の学校調査において、沖縄の学校と伝統芸能の関係性に大きな特徴が顕著にみられたことから、補足調査の必要性が共有され、三つの小学校長へのインタビューが実現した。また、渡邊は、南風原町で25年続いた民俗芸能交流会の企画・担当者である南風原文化センター大城和喜館長との出会いに恵まれたことから、本研究の核心に関わる重要な成果を得ることができ、それらは、Ⅲの二つの掲載論文に結実した。

今後の課題としては、青年会をはじめとする地域的な社会教育・生涯学習の団体・組織が、どのように芸能に携わり、その「継承」を支えているか、また学校との協力・連携の課題は何か、などについての現地調査を行うことである。そこで、それぞれの地域や活動や個人において「芸能」「文化」の意味するものは何かを検討したい。また南風原地域においては、地域の変化と芸能のあり方との関わりや課題、文化的アイデンティティの問題などについて、さらに考えていきたい。

(2) アンケート調査

① 調査の概要

【調査名】

「学校教育における地域文化伝承への取り

組みに関わる調査」

【調査主体】

「伝承文化と生涯学習」研究会

【調査目的】

本調査は、3つの府県の諸学校を対象として、学校において、正規の教育活動の内外で、どのような伝統的な地域文化活動が取り入れられているかの実態を把握することを目指して行なうものである。

本調査における「地域の文化伝承への取り組み」については基本的に、「その地域に伝統的に伝わる祭り、行事、習俗、文化的活動などについて、前の世代が次の世代に伝え、次の世代が引き継いで発展させていくための、あらゆる活動や試み」（伝統的なものとまでは言えないが、地域文化を活かしながら新たに創り出した文化的活動も含む）との説明を示し、その定義のもとで回答を得ている。このように本調査においては「伝統」を、比較的ゆるやかな意味をもった言葉として用いている。

【調査期間】

- ・京都府 2007年（平成19年）6月28日～7月20日
- ・新潟県 2007年（平成19年）6月21日～7月13日
- ・沖縄県 2007年（平成19年）6月14日～7月6日

【調査方法】 郵送による質問紙調査

アンケート用紙は、京都府、新潟県、沖縄県の三府県で、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の各学校校長宛に送付し、同封の返信用封筒に回答を入れて返送するように依頼した。

アンケート用紙は、各府県の教育委員会ホームページ（2007年6月10日時点）に基づいて、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の前項に対して郵送した。

【調査回答校】

本調査における調査回答校とは、本アンケートを配布した全学校のうち、アンケートの回答を返送した学校である。該当校の総数は1,059校である。

【回収率】 46.9%

② 主な調査結果

A. 全体の動向

1) 記入者の所属学校と職名（問0）

本調査回答校のうち、54.6%は小学校、

29.7%は中学校、12.0%が高等学校、3.6%が特別支援学校である。

回答者は、9.6%が校長、50.7%は教頭・副校長、25.0%が教務主任と管理職が大半(85.3%)を占めており、特別活動担当は2.5%であった。この意味では、各々の回答は、学校全体の方針を色濃く反映したものと考えられる。

2) 当該地域における「お祭り、行事、習俗、文化的活動」の具体名(問1)

回答校の88.2%が、具体的名称を挙げた。

「沖繩」・糸満ハーレー・ハーリー・角力・エイサー・三味線・大綱引き・獅子舞・親子ムーチー祭り・壺屋陶磁器祭り・豊年祭の道ジューナー・琉舞・空手・組踊「銘苺子」・旗揚げ・琉球がすりの製作・ふるさと伝統芸能祭り・課題研究において「八重山の郷土の文化を知る」をテーマに民話、音楽、祭りを学習

「京都」・蛇切り岩伝説・保津川下り・保津の火まつり・和太鼓・嵯峨中パレード・地域学習において保津川下りやその開拓者の角倉了以についての学習・あじさい祭り・神社(八幡神社、請田神社)等についての学習・東九条マダン・友禅染・竹細工・六斎念仏の取組、春日祭礼御輿、鼓笛隊の巡行に向けた練習・綾部太鼓(大打、小打による連太鼓)・狂言・清水焼・伏見稲荷大社、藤森神社等の流鏝馬や紫陽花展・和菓子づくり・生け花・扇子づくり・雅楽・狂言・清水焼・水引き・書道・華道・茶道・和装・福知山踊りロボットを製作し展示公開・福知山踊り

「新潟」・コマランド・きなせや祭(学校行事)・創作舞踊(よさこいそうらんから派生した踊り)を発表・函工のモチーフとして「鬼太鼓」・「人形浄瑠璃」の鑑賞・まゆ工芸・時代檄まつり・盆踊り「大の阪」(念仏踊りともいわれている)・赤塚まつり・佐潟音頭・五十沢歌舞伎・おはやしの太鼓・綾子舞(重要無形民俗文化財)・佐渡エコミュージアム構想・悠久太鼓・葎谷太鼓の鑑賞・ひこせんを作り食べる・たるばやし・ヨサコイソーラン・大凧づくり・仏壇づくり・裸押合大祭・じょうもん市・祭ばやしクラブ・奇祭「竹のからかい」・さけ捕獲・そば作り

3) 授業や特別活動の中での地域の文化伝承への取り組みの実態(問2)

三府県を通じて、学校の正規の活動で地域文化伝承活動に「本格的に」取り組んでいるとの回答は、総合的な学習が8.6%、教科教育が2.6%、学活・特別活動が3.0%、読書活動では0.0%と、全体的に1割未満の学校に

留まっている。これを見る限り、総合的な学習が、学校教育の中に文化伝承活動を取り入れられる契機の一つであることがわかる。

教科教育に「本格的に取り入れている」との回答は2.6%、「部分的に取り入れている」は24.6%であり、46.1%は「していない」とされる。「取り入れている」教科としては、体育32.8%、社会26.6%、国語6.6%、その他34.1%となっており、体育と社会が文化伝承活動と親和性が高いことがわかる。また総合的な学習では、8.6%が「本格的に」、38.1%が「部分的に」取り入れており、38.8%が「していない」と回答している。学活は48.9%、読書活動は59.1%が「していない」と答えた。

4) 学校行事の中での地域の文化伝承への取り組みの実態(問3)

5) 取り組みの体制と、専門家や地域の人々のかかわりの実態(問4)

三府県で学校行事において、「本格的に」取り組んでいるとの回答は、運動会・体育祭9.0%、文化祭・発表会6.8%であり、「本格的」「部分的に」を合わせると、文化祭・発表会が34.1%、運動会・体育祭が33.6%を占める一方、レクリエーション活動では4.9%に留まった。回答校の3分の1が、運動会・体育祭や文化祭・発表会などの学校行事に、何らかの形で文化伝承活動を取り入れている。

取り組み体制としては、複数の担当教職員による体制43.7%、全校体制35.5%、担当教職員が独自に取り組む体制11.9%、担任レベルで取り組む体制8.9%の回答を得た。また、専門家や地域の人々については、専門家の技術指導42.3%、手伝い41.3%の割合で地域の人々が学校に訪れ、活動成果の地域への公開を行う学校比率が16.4%となった。

6) 課外活動と地域の文化伝承への取り組みの実態及びその指導者(問5-1、問5-2)

三府県で課外活動での取り組みが「ある」と答えたのは、クラブ活動で13.0%、部活動で5.5%に留まる。「ある」と答えた学校において指導者は、地域の専門家40.7%、地域の有志22.8%、教職員21.4%、生徒の自主活動(指導者なし)が3.4%である。このうち地域の専門家については6割以上(60.1%)、地域の有志については8割(80.0%)が無償で関わっている。すなわち、課外活動での取り組みは回答校の1割前後ではあるが、そのうち3分の2程度の活動が、地域の人々の援助や支援によって成立し、その大半が、地域の人々のボランティアとしての貢献によるものであることがわかる。

7) 地域の文化伝承への取り組みへの施設開放の実態(問6)

三府県にで文化伝承活動に関わる学校施

設の開放は、体育館・屋内運動施設 25.6% (そのうち「いつも」8.6%)、校庭・屋外運動場 17.7% (「いつも」4.9%)、実習室・調理室・理科室 7.6% (「いつも」0.9%)、学校図書館・図書室 5.0% (「いつも」1.0%)、一般教室 5.7% (「いつも」1.2%) となっている。回答校では、文化伝承活動に関わる学校施設の開放は全体の 2~3 割程度に留まり、屋内外の運動施設や運動場など、運動系の活動を中心に、地域の人々に開放されていると見られる。

B. 三府県にみられる主な違い

【授業や読書活動における文化伝承活動】

教科教育における文化伝承活動を比較すると、沖縄における取り組み比率の高さが目立つ。具体的な教科としては、京都、新潟では社会での取り組みが、沖縄では、体育での取り組みが多く見られる。

また「総合的学習の時間」では、沖縄 55.2% (「本格的に」7.7%)、京都 48.2% (「本格的に」7.0%)、新潟 41.1% (「本格的に」9.9%) の順位で、「取り組んでいる」。程度は異なるが、回答校の約半数がこの時間に文化伝承活動を行っていることが分かる。

また学活・特別活動での「本格的」及び「部分的」な取り組みは、沖縄 33.8% (「本格的に」3.1%)、新潟 20.8% (「本格的に」2.5%)、京都 16.9% (「本格的に」3.2%) の順になる。「していない」は、新潟、京都が各々 5 割を超え、沖縄は 27.6% であった。

さらに、読書活動は全体的に低く、沖縄で 11.1%、京都は 5.3%、新潟は 4.1% であった。「していない」が新潟、京都が各々 6 割以上を占め、沖縄は約 4 割の取り組みがあった。

回答校を見る限り、教科教育(「社会」「国語」「体育」)、総合的な学習の時間、学活・特別活動、読書活動、全ての項目で、沖縄が、京都及び新潟の比率を上回っている。

【学校行事における文化伝承活動】

文化祭・発表会での取り組みは、沖縄で 56.3%、新潟は約 3 割、京都は約 2 割である。また運動会・体育祭では、沖縄での取り組みはさらに多く、回答校中 72.0% (「本格的に」24.1%) が文化伝承活動に取り組んでいる。これに対し、新潟は 27.5% (「本格的に」5.3%)、京都が 9.2% (「本格的に」1.8%) である。沖縄では、運動会・体育祭における文化伝承活動の取り組みが顕著なことが伺える。だが、レクリエーション活動での取り組みは、三府県ともに圧倒的に少ない。

取り組み体制は、三府県いずれも教職員複数担当制が多く、沖縄 49.4%、京都 44.0%、新潟 39.4% を占める。また全校体制で取り組む比率は、新潟 39.7%、沖縄 34.6%、京都 28.6% である。学校行事として文化伝承活動に取り

組む際は、複数教員による担当制、あるいは全校体制で取り組むケースが多い。

さらに、専門家や地域の人たちのかかわりについては、地域の専門家が技術指導を行う比率は三府県ともに 30~40%、必要に応じて地域の人々に学校行事に参加し手伝ってもらっているのは 30~50% を占めた。また、文化伝承活動の成果を公開しているとの回答は、新潟 17.3%、京都 16.0%、沖縄 15.5% といずれも低かった。

【課外活動における文化伝承活動と指導者】

クラブ活動では、沖縄で 25.7% と 4 分の 1 強の回答校で文化伝承活動が取り組まれているが、京都は 9.5%、新潟が 8.6% と 1 割以下の取り組みに留まる。また部活動では、三府県とも 1 割に満たないが、沖縄での文化伝承活動への取り組みが若干多い。指導者としては、地域の専門家が一定の割合を占める(新潟 46.7%、沖縄 39.3%、京都 34.6%)。地域の有志の人々による指導は 2 割以上(沖縄 25.3%、京都 21.0%、新潟 20.8%)、教職員による指導も 2 割程度であった。生徒自身による活動は、沖縄 4.7%、京都、新潟ともに 2.5% であった。このように、課外活動で文化伝承活動に取り組む際、地域の専門家の関わりが高く、地域の有志や教職員も同じくらいの比率で関わっているようである。

地域の専門家、地域の有志の人々が課外活動に関わる際、気になるのは、金銭的補償の有無である。課外活動・文化伝承活動への無償での関与は、沖縄では 78.0% に登り、また京都でも 50.0%、新潟で 46.4% である。また、地域の有志の人々は、沖縄では実に 94.7%、京都で 70.6% の人々が無償で関わっていることがわかった。なお新潟は 46.4% であった。

【文化伝承活動に関わる学校施設の開放】

ここでも沖縄が割合の高さがめだった。沖縄では、体育館・屋内運動施設では、「いつも開放」及び「時々開放」の比率が、42.6% (新潟 20.2%、京都 19.7%)、校庭・屋外運動場では、36.8% (京都 18.0%、新潟 7.9%)、実習室・調理室・理科室では、11.5% (京都 7.7%、新潟 5.7%)、学校図書館・図書室が、11.1% (京都 3.2%、新潟 2.9%)、さらに一般教室では 10.0% (京都 5.3%、新潟 3.9%) であった。沖縄はすべての項目で京都、新潟と比べ開放性が高いことがわかった。体育館・屋内運動施設では京都・新潟のほぼ 2 倍、校庭・屋外運動施設は、京都の 2 倍、新潟の 4.5 倍程度という結果となった。

*なお、本アンケート調査の補足調査として、沖縄の 3 つの小学校長にインタビュー調査を行っており、学会発表で一部を報告した。

(3) 国外予備調査について

2008(平成20)年10月(ソウル・北京)と2009(平成21)年3月(珠海)に、韓国と中国を対象とする国外予備調査および現地研究者への協力依頼・研究打ち合わせを行った。特に、10月の訪韓・訪中は代表者を含め、4人のメンバーが参加し、短期間の滞在にしてはかなり内容の充実した訪問となった。この調査旅行の日程と概要は次の通りである。

- 10月10日 ソウル着 韓国伝統舞踊見学
10月11日 国立民俗博物館、国楽院(博物館・伝統音楽公演)研究会(菅原百合さん)
10月12日 北京着
・北京師範大学珠海分校の呉忠魁教授と胡学亮副教授と打ち合わせ
・石景山青少年活動センター見学・インタビュー
10月13日
午前 北京師範大学で研究会(石中英教授)
午後 北京連合大学で研究会(張妙弟北京学研究所所長)打ち合わせ会議

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 芳澤拓也「沖縄の地域文化伝承をめぐる小学校と地域の連携について」『沖縄県立芸術大学紀要』No. 17、2009年、47-62頁、査読無し。
- ② 渡邊洋子「沖縄における『伝統芸能』と生涯学習・社会教育」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』第7号、京都大学大学院教育学研究科生涯教育学講座、2008年、63-81頁、査読無し。

[学会発表] (計1件)

- ① 渡邊洋子・中島純・相庭和彦・前田稔・芳澤拓也「地域の文化伝承と生涯学習—三府県における学校対象調査を中心に—」日本社会教育学会第55回研究大会自由研究発表部会、和歌山大学、2008年9月20日。

[図書] (計5件)

- ① 渡邊洋子編著『研究成果報告書「伝承・習い事」文化における学習様式と生涯学習の現代的課題に関する比較研究』(課題番号1830167)(平成18年度～平成20年度科学研究費補助金(基盤研究(B))(研究代表者 渡邊洋子)、2009年3月、全157頁。
- ② 渡邊洋子編『研究成果報告書 同前』別

冊1(「伝承・習い事」グラフ集他)、全171頁。

- ③ 渡邊洋子編『研究成果報告書 同前』別冊2(写真集)。全57頁。
- ④ 渡邊洋子「伝統芸能という『共有知』とローカル・アイデンティティの可能性—沖縄県島尻郡南風原町の民俗芸能復活の取り組みを手がかりに—」日本社会教育学会編『〈ローカルな知〉の可能性—もう一つの生涯学習を求めて』東洋館出版社、2008年9月、130-144頁。
- ⑤ 相庭和彦『現代生涯学習と社会教育史—戦後教育を読み解く視座』明石書店、2007年、全294頁。

[その他]

- ① 張妙弟・張帆「情況と見解—在日本“伝統文化活動”課題組的交流」*Lifelong Education and Libraries, Lifelong Education and Libraries, Graduate School of Education, Kyoto University*, 2009, pp. 19-25。(2008年調査時に執筆依頼した原稿。なお、本論文は、図書①の『研究成果報告書』本編に転載し、日本語訳とともに掲載。)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

・渡邊 洋子 (WATANABE YOKO)
京都大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：70222411

(2) 研究分担者

・中島 純 (NAKAJIMA JYUN)
新潟経営大学・経営情報学部・教授
研究者番号：30320675
・相庭 和彦 (AIBA KAZUHIKO)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：00222464
・前田 稔 (MAEDA MINORU)
東京学芸大学・教育学部・講師
研究者番号：20376841
・芳澤 拓也 (YOSHIZAWA TAKUYA)
沖縄県立芸術大学・美術工芸学部・講師
研究者番号：10389950

(3) 連携研究者

なし

○研究協力者

・宮前耕史 (MIYAMAE KOSHI)
韓国啓明大学国際学部日本語学科・講師
・中池竜一 (NAKAIKE RYUICHI)
京都大学大学院教育学研究科・助教
研究者番号：00378499